

久しぶりの二上山

4月19日久しぶりに二上山早朝登山をしました。久々と言っても、わずか5日間なのに、山の花々は様変わりしていました。この季節の移ろいは速いですね。ウワミズザクラが散り始め、サクラは青葉が茂っています。将に「三日見ぬ間の桜」です。

ハナイカダが瑞々しい葉の上に同色の小さい花を乗せています。登山道脇にはシャガが目立ち、無数のチゴユリ、ウツギの仲間も花開いていました。

写真左 ツクバネウツギ



写真上 ホウチャクソウ

野山の不思議④ 健生会友の会の「ふれあい広場」から転載、加筆しました。

血は流れるが、止まらない、痛くない

びっくりするヒルのすご技

「山と花のたより」82号で「ヤドリギの茎や葉は膝痛、腰痛の薬とされる」と書きました。膝痛・腰痛は古今東西人類共通の課題らしく、その痛みを鎮めるための努力、工夫が重ねられています。

ガラガラヘビの猛毒がモルヒネの二百倍の鎮痛効果があり、それを膝痛の薬にする研究、日本海に大量発生して魚網を破るエチゼンクラゲを膝の軟骨治療に活用する試みなどが報道されたのはつい最近の事です。そして今回もその膝痛の薬にかかわる話です。

山を歩いた後、靴をぬぐと靴下が赤くそまり、その靴下の中から血を吸ったヤマビルがコロコロと出てくる場合があります。足の傷口から血は流れるが止まらないし、いたくもないのです。私は少年時代からこれが不思議でした。後にヤマビルが血液凝固を妨げる物質(ヒルジン)を出すことを知って感心しましたが、さらに鎮

写真左 ヤマブキシソウ

痛物質も出すのだと知ってなお驚



きました。つまりヒルは血を止めず、相手に傷みを感じさせずに動物の血を吸っているのです。「さすが！吸血のプロやなあ」とほめたくなる見事さです。

ヒルは長い進化の過程で「吸血して生きる」という生き方とこの不思議な能力を身につけたのでしょうが、「生物は進化する」事を知らなかったら「神さまはうまい事作りはったわ」と思ってしまいますね。

洋の東西を問わず、ヒル（チスイビル）は医療行為に使われてきたようです。いわゆる瀉血（しゃけつ・治療の目的で患者の静脈から血液を体外に除去すること＝広辞苑）に使われたのです。何年前か前、テレビの「世界うるるん滞在記」で、

生きているヒルを土産にする中近東の田舎の話が紹介され、そこではヒルを背中に這わせてもらって男性が喜んでいるシーンが映し出されました。そしてヨーロッパでは、膝痛に生きたヒルの鎮痛能力を使う治療が実際に研究されているそうです。

ところでヒルは身近な生き物になりつつあります。奈良公園の森にもいますし、鈴鹿山系や大峰山脈では増えていて、棲息域を広げているようです。川上村村議の塩谷さんに聞くと「村の中にも出るようになった」との事。鹿などが増え、人の世界にも持ち込んできているのでしょう。

さて、生物進化の妙に感心したとしても、ヒルに取り付かれ、吸血されるのは御免こうむりたいですね。ヒル防除薬はいろいろ出ているようですが、「ヒルに塩」という言葉があるように手近な食塩を事前に靴や靴下に振り掛ける、靴下に塩水をしみ込ませておくなどが手軽に出来る事でしょうか。

それでも効果がない場合は「相手は山の先住者なのだ、少々血を吸われるのは仕方ない」と悟りを開くか、いやなら夏にヒルが棲む山に登らないことですね。

ニリンソウが満開でした 金剛山カトラ谷

4月下旬に金剛山に登りました。青崩に車を置き、石ブテ東谷から中尾の尾根を通過して9:00に大日岳に着きました。ニリンソウ、ヤマエンゴサク、ミヤマカタバミ、ヤマウルソウなど楽しみつつ、苑地に向かい、シロバナエンレイソウ、シャクナゲ、美しいシラネアオイを見てカトラ谷を下りました。ヤマシャクヤクはまだ硬い蕾でしたし、クリンソウもまだでしたが、ニリンソウの群落が見ごたえのある状態で満足して帰ってきました。シロバナハンショウズル、シロバナネコノメソウ、クサノオウ、アケビの花も丁度見頃でした。 以上 88号



写真上 チゴユリ

